

# 週刊センターニュース

No.102



第102号(2006年3月27日)毎週月曜日発行  
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター  
URL: [http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou\\_rche/index.htm](http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm)

## 第110回共同学習会のご案内

日時: 4月6日(木) 16時~17時30分(通常のと異なります。)

場所: 角間キャンパス総合教育棟2階大会議室

テーマ: 法人化3年目の金沢大学の課題

発表者: 本木 章喜(理事(総務・人事担当))

## 工学部教育方法改善シンポジウムより

3月10日、本学工学部第7回教育方法改善シンポジウムが行われた。まず、教育方法改善委員会委員長の太谷吉生教授より17年度の教育改善活動について、工学部の「中期目標・中期計画」と対応させながら報告があった。続いて、第1分科会「大学院カリキュラムの実質化」、第2分科会「導入教育のあり方(初学者ゼミ、大学・社会生活論)」、第3分科会「卒業生による達成度評価のフィードバック」、第4分科会「派遣型高度人材育成プロジェクト」に分かれて報告、討論が行われた。筆者は、第2分科会で3月1日に公開されたシラバスに基づいて、各学部および大学教育開発・支援センターが開講する初学者ゼミの授業内容について概要を述べた。第1分科会「大学院カリキュラムの実質化」には参加できなかったが、工学部では13年度より学部教育と大学院教育の連携についての検討が継続されていることを知った。昨年1月の中教審答申にあるように、今後、学部・大学院の一貫教育とそのカリキュラムについての検討は、多くの大学において重要な課題となることが指摘されている。この問題は、本学においても全学的な議論へと展開すべき問題であると思われる。(文責: 大学教育研究開発部門 西山)

## 教育学部FD研修会より

3月14日、本学教育学部において第4回教員養成改革フォーラム・平成17年度教育学部FD研修会が行われた。シラバス改善試案の提案をはじめ、授業アンケート、公開授業週間など17年度の教育学部FD活動が総括された。引き続き、広島大学大学院教育学研究科の田中春彦先生により「教科内容学のカリキュラム開発 理科内容学(化学分野)を中心に」について講演が行われた。教員養成大学・学部における教科専門科目、特に「理科内容学(化学)」の在り方について提案された。例えば理学部などでの教育との相違について意識すべき点は、教員養成系大学・学部では「生徒を指導するための化学」の視点が重要であるとの主張である。そのために、無機化学、有機化学、物理化学など化学的内容を網羅的に扱うことを避け、中・高で化学を指導する上で必要な内容を中心に据えたコア・カリキュラムの開発を実践された。その成果はこの4月に培風館から刊行予定の「これだけは知っておきたい教員のための化学」としてまとめられている。教職専門職大学院の設立について議論されている大学もあると聞くが、教員養成に今まで以上に特化した学部カリキュラムへの移行が検討されて

いるようである。(文責：大学教育研究開発部門 西山)

## 理学部 FD 講演会より

3月20日、本学理学部FD講演会において、九州大学高等教育総合開発研究センターの副島雄児教授による「九州大学における基礎科学科目の位置づけ 力学基礎未履修者クラスの経験から」についての講演があった。高校で物理を履修していない未履修者のクラスについてのご自身の分析と、九州大学における全学教育科目、特に理系のカリキュラムについての検討状況について説明された。この4月から、ゆとり教育課程で教育を受けた学生の入学が始まる。高校での十分な学習を前提とせず、初年次の学生に対していかに授業を行うかは未履修者の問題を越えて、4月から直面するきわめて大きな問題である。

九州大学では理系学生に対する「物理未履修者クラス」を実施しているが、力学の未履修者クラスは6年前から、また電磁気学の未履修者クラスは2年前から行われている。副島教授は16年度、17年度、ご自身が担当された力学の未履修者クラスの授業内容、授業期間を通じた学生の理解度の推移を分析した結果について説明された。物理を専攻していない大多数の理系学生に物理を教える意義は、物理のおもしろさを伝えることであると述べられた。共鳴現象や減衰振動、重力と遠心力のポテンシャルで拘束された惑星の楕円運動を知ること、さらに太陽系の誕生や彗星の存在に気づかせることは力学の魅力を伝える上で欠くことのできない授業内容であること、したがって未履修者クラスにおいても、それらの内容の理解に必要な数学的手法を含む力学の基本をいかに教えるかという一般的問題に回帰すると述べられた。授業期間の最初と最後、期間中に2回、計4回の授業項目に対する学生自身による自己診断を実施し、学生の理解度の時間的推移を定量的に分析しておられた。

このような地道な授業分析の蓄積に基づいたものと想像されるが、九州大学では18年度から新しい全学教育カリキュラムが実施される。物理の力学については既習者クラス、未履修者クラスともに、講義と演習を連続して計2コマ開講することとした。また、未だ構想段階ではあるが、物理と数学との履修内容の連携の不備や双方の履修のタイミングのずれを是正するためのブリッジ科目の開発について検討されているとのことであった。

18年度以降、理系基礎科目のあり方について再検討することは多くの大学において緊急の課題になると思われる。本学においても、3学域体制のスタートに向けて理系基礎科目、理系専門基礎科目などさらなる検討の進展が期待される。

(文責：大学教育研究開発部門 西山)